

祖先崇拝とキリスト教

(文責在記者)

森 岡 清 美

この度「日本及びアジアにおける祖先崇拝と死者儀礼」という全体のテーマで研究をお進めになる第1回として私に話しに来いということで、そこに書いてありますのは、佐藤先生から頂戴しましたタイトルでございますので、そういうことでお話しをさせていただきたいと思います。

明治7年の11月、10年のアメリカでの勉強を終えまして帰国しました新島襄、ご承知のとおり元安中藩士でございますが、東京からすぐ人力車で安中へ帰りまして、そして両親に会うのですが、その際に旧安中藩士その他有志の人々を対象に講演を致しまして、キリスト教の伝道をするわけでございますが、たくさんのお聴衆の中から湯浅二郎、隣のICUの初代の学長の湯浅八郎先生のおとうさまでございますが、湯浅二郎ほか30数名の人が残りまして、聖書研究の社中を作って勉強を始めるわけですが、その中には当然、旧安中藩士も居りましたわけで、そのうちの一人、旧安中藩の藩医であります***ショウアンという人に新島襄が信仰入門を、いくつか重要なポイントを箇条書きにして書いて、そして同志社を創立するべく京都に向かって安中を去るわけでございますが、その冒頭にですね、第一に天地間に一つの真神のほか他に神仏なきことを信じ、一心一意、これを敬しこれを拝しこれに祈るべしという大原則を示しまして、その次に、先祖を敬しその名を保有するは子孫の努むべきところなれども、これを拝しこれを祭るは誤りとす。礼拝したり祭ってはイカンと、それは誤りであるということを示しました。で、初代信徒はこの新島襄の教えを忠実に守りまして、あるいは神棚とか屋敷神を撤去する、また仏壇を人によっては焼却す

る。そこまで行きませんでも取り払いまして蔵などにしようという、そういう事をしましたわけであります。

その他、例が幾つかございますけれども、日本のプロテスタント教会の初代の信者の中には、仏壇を取り払う、位牌を例えば利根川に洗われております群馬県の一歩南の佐波郡島村（？）という、現在は名称が変わっていると思いますが、そこにございます旧メソジスト系の島村教会、その初代信徒はですね、利根川に先祖の位牌を流して捨てるということもやったわけがございます。そういうふうなやり方を最初はしましたわけでありましたが、しかし段々とそういうことではなくて、保存する。保存をするうちに段々またそれを使う、というふうなことになってまいりまして、しかしながら教会はあまりはっきりそれに対してどうしたらいいかということの指導をしない長い年月があったかと思うわけであります。で、日本人の信仰の中で、先祖をどう扱うかということとは極めて重要な問題でありますので、その問題のありようと言いますか実態をよく見すえて、そして教会としてどうするかという態度を検討してみるということは、極めて重要な課題かと思うわけがございます。

比較的その点はカトリックが先行しているように思いますけれど、今日提出されました課題というのは、その問題に真正面から取り組むのであるというふうに、私、拝見いたしまして、その第1回にお呼びいただきましたことを大変光栄に存じております。

さて、そこにレジュメみたいに書きましたのは、黒板を使う代わりに書きましただけであまり要領を得ておりませんが、それに沿いながらお話しをさせていただきたいと思います。

まず、祖先崇拜というこの言葉でいいのだろうか、その他にもあるけれどもその他の言葉とどういう関係になるのだろうか、ということを少し整理しておきたいと思うわけであります。皆さん、祖先崇拜と申しますと宗教学事典に出ておりますので、それをお引きになるといいと思いますが、この祖先崇拜という項目を担当しましたのが、竹田聴州という亡くなりましたですが、「祖先崇拜」という大変いい書物を昭和32年にお出しになっておる著者でございますが、竹

田聴州さんは、日本では祖先崇拜という語は ancestor worship の訳語として明治以後定着したというふうに述べております。ですから、祖先崇拜というのは元々日本人が使っていた言葉ではなくて、ancestor worship という言葉を翻訳すべく採用した言葉であるというふうに申しておりますけれど、いつだれがどういうふうに採用したかということは明らかでございません。当然明治前期、初期であると思いますが、そのころヨーロッパから紹介されまして日本の思想界に大変大きな影響を与えた著作の一つと致しまして、イギリスの社会学者のハーバード・スペンサー。これは「天賦人權論」とかですね、いろんな当時の政治運動の議論の論拠としても盛んに読まれた、愛読されたものでありますが、Principles of the Sociology という本があるんですが、この中でスペンサーはこういうふうに言っているわけでありまして。「ancestor worship というのはあらゆる宗教のルーツである」というふうに言っているんです。これは宗教のルーツについてのいろんな学説の一つでありまして、彼はそういう学説を打ちだした、という程度にお聞き頂ければいいのでございますが、従いましてスペンサーの本が読まれたとすれば、スペンサーの本の翻訳の中に ancestor worship の訳語がちゃんと出ておるだろうと、それが祖先崇拜かなと思って調べてみますと、明治15年に「社会学の原理」という大変忠実な訳が乗竹という方によってなされておりますが、そこでは祖先尊信というふうにございまして、祖先崇拜という言葉は使われていないのであります。

ですからまだよく分からないんですが、そこで一つ申し上げておきたいと思ひますのは、祖先という言葉のほかに我々は先祖という言葉を使うわけでありまして。ひっくり返しただけです。同じ漢字を2字であります。先祖というのか、祖先というのか、あるわけです。今まで祖先と申してまいりましたが、先祖というのか。で、この二つのことを並べてみますと、先祖の方が日本の国史・歴史と民族の中に定着している言葉ではないかと思うんです。例えば、日本書紀という日本の古代に成立した正史を見ますというところには先祖という語が使われております。ただ「せんぞ」とは読まないんです。「とおつおや」遠祖といいますね。あるいは「さきつ親」、あるいは先祖と書いて単に「おや」と

いうふうな読み方でございますけど、日本書紀の段階で既にこれを使っておりまして、そこに「祖先」というのはないんです。先祖はあるけど祖先は無いんです。それから民間のいろんな記録、例えば近世大名家の家訓・家宝とか、あるいは商家の家訓・家宝とか、それを見ますというのとどれもですね、先祖を大事にしなきゃいけないということを説いていますが、みなそこは「先祖」なんです。先祖「祖先」ということは言ってないです。「先祖」なんです。それから、学問もそう無い普通の田舎の田夫野人と申しますか、そういう普通の人を使う言葉の中ではどうかといいますと、「先祖」というのはやたらあるんですね。「先祖」という言葉を語幹とする語は幾つもあるんです。例えば「先祖頭」とか、「先祖講」先祖を祭るための講なんでしょうね。あるいは「先祖正月」とか、「先祖棚」、「先祖畑」先祖を祭るための費用を安定的に確保するための畑でしょうかね。「先祖祭り」とか、あるいは「先祖になる」……。民間のそういう言葉には「祖先」というのは出てこないんです。今申ししたのは柳田国男編・監修の「総合日本民族語彙」という数巻からなる辞典がございますが、それを引きますと出て参ります。「先祖」というのはたくさんでてまいります、「祖先」というのは出てこない。ですから「祖先」の方は、これはちょっと違うらしい。「先祖」こそ日本の歴史、民族に根ざす語である。「祖先」と言うのはどうかというと、これはどうも近世の儒者が好んでこちらを用いたようですね。漢語としては両方あるようであります。

近世の儒者は好んで「先祖」と言わないで「祖先」と言っていたようでありまして、学問のないものが普段日常会話で使うような謂わば卑賤な言葉じゃなくて、外国のものを翻訳したり、きちんとした格調高いものをやるときには、「祖先」と、こういうことに明治以降なったんじゃないかという感じがします。明治以降の文献の一つに「天皇の詔勅」というのがあるんです。それはみんな「祖先」なんです。「先祖」というのはないんですよ。「祖先」という言葉しか使っていない。ですから私は、そういうふうに「祖先」と「先祖」は使われ方が違ってきたんだと思うわけですが、ただ、「祖先」の方が格調高い言葉として学問のある人、ちょっと学のある人はですね、「祖先」を使うぐらい

のことではなかったかと思うんですが。

それが明治末期から大正以降ですね、国民教育の中で「祖先を尊べ」とかね、祖先についてのいろんな教材が明治44年以降出て参るわけであります。それを通して、国定教科書を通して義務教育の段階で「祖先」という言葉を小学校で使うんですね。そこで一般化したんではないかと、私は思っております。そんなことで、例えば広辞苑を引いてみましても先祖と祖先の区別がはっきり分からないですね。はっきりつけてるような辞典もありますけれども、どうもそれはあまり根拠ありとは思えない。わたしは、ですから、両方は来歴を異にする語ではないかなと思います。しかしながら、大正、昭和以降はですね、今言いましたような経過の中で両方がチャンポンに使われているというふうに見まして、「祖先」も「先祖」も現代の使い方としては区別をしないでよろしいと、好みによってお使いになったらいいだろうというふうに考えております。

私はどちらかと言いますと、「先祖」の方を使いたいんで、後は「先祖」を使いますけどそんなふうを考えて見ておるわけでございます。翻訳で申しますと、明治4年に有名なスマイルズの Self - Help 中村正直が翻訳しました「西国立志編」というこの本の中では、「祖先」と訳したり「先祖」と訳したり、両方使っておりますが、こんなところがあるいは ancestor に「祖先」をあてた更始かも知れないというふうに思っております。ともかく現在では同義と考えていいのではないかと。

さてですね、この次は worship でありますけれど、これを崇拜というふうに訳しますと、当然 ancestor worship というのは、祖先崇拜ということになりますし、そしてまた、ancestor worship というのはスペンサー流にいいますと、宗教のルーツ、あらゆる宗教のルーツと考えますならば、この訳語は妥当なものと言えようかとおもいます。しかし、日本人にとりまして祖先は果たして崇拜の対象なんでしょうか。これはやっぱり大きな問題だと思うんです。崇拜という言葉を使いましても、本当に崇拜の対象なのかどうか、これは少し検討をする必要があろうかと思います。ですから先ほども乗竹孝太郎という人が、スペンサーの訳本の中で、祖先崇拜の事を「崇拜」と言わないで「尊心」という

訳語を使っておりますのも、「崇拜」というのはもう一つピンとこない、もう一つ距離があるようだということからではないかと思います。

最近ので申しますとエリアーデ編の Encyclopedia of Religion という15巻ほどのものが出ておりますが、この中で ancestor worship を担当したのは、ヘレン・ハデカーという日本の霊友会を研究した人なんですけれども、この方は ancestor worship の項目の中で、ancestor worship の worship の意味は、これは不確実であって、(日本についてだけ言っているわけじゃなくて、これは辞典ですから全世界的な視野の中で言っているわけですけど)、worship の意味は、不確実であって、その形は地域によって様々だし、従ってそれを特色づける態度もマチマチである。言い替えますと worship という、我々がその言葉で感じるようなものではない態度も広く含むと考えた方がいいというふうなことから思います。

霊友会は先ほど申しましたようにヘレン・ハデカーが研究しましたので、特に日本の説明をします時にはね、ancestor worship といわないで、reverence for ancestors というふうに、つまり「祖先崇敬」という言葉を使っております。

ですから私は、ancestor worship の worship にも、またその訳語にもこだわらないで、この問題を考えたほうがいいんじゃないかというふうに思っております。「祖先崇拜」という語があれば、ancestor worship を思い出しますし、その語にやっぱりこだわりますけど、どうも日本のことを日本におけるというふうに考えますとあまり崇拜という、あるいは worship というその元の言葉にもこだわらない方がいいんじゃないか。すでに先ほど言いましたように乗竹という人の「祖先尊心」という言葉の例がありますし、それから、言いかけましたように明治43年ぐらいであります(先ほど44年と言いましたが43年の誤りです)、使用が開始されました第2次国定教科書の修身の中に、「祖先を尊べ」と、「祖先」という教材がたくさん出ますんですが、その中で国民教育の基本項目として「祖先」が盛んに論ぜられたわけです。この辺から例の家族国家論と言うですね、政治学者も大変問題にしております一つのイデオロギーが出て参るわけではありますが、そういう文脈で「祖先」が盛んに論ぜられたんです。

紀 要 1

ですから小学校の教育で盛んに言われるだけじゃなくて、倫理学者とか、そういう方がたくさん議論いたしました。その時に穂積八束とかですね、あるいは井上哲次郎というふうな当時の東京帝国大学によって論陣を張った方々は「祖先崇拜」という語を用いましたけれど、亘理章三郎、これは東京高等師範学校の教授、これは「祖先敬慕」という用語を用いております。それから深作安文という方は、「祖先尊崇」という語を採用しております。それからまた穂積陳重という、これは穂積八束の兄でありまして、東大の法学部を作った方ですが、この方が1912年にそこにも書きましたように ancestor worship and Japanese law という本を書きまして、これはたいへん立派な本でございますが、そして穂積巖夫というんですか、これは甥の方のようではありますが、その英文を邦訳いたします時に、ancestor worship を「祖先祭祀」というふうに崇拜と言わないで「祭祀」と言っておりますのは、これは当然穂積陳重とよく相談をしてこういうふうにしたと思うわけではありますが、「崇拜」の語が不適當であったという判断であろうかと思えます。こういうことございまして、日本人の先祖に対する儀礼とか態度はですね、worship という語でキリスト教徒とかイスラム教徒が神に対して捧げる worship と同じではないという認識に基づくものであろうかと思えます。

そういうことで私は表題には佐藤先生からいただきましたので「祖先崇拜」と致しましたけど、あまりこれは使いませんで、他の言葉、特に「先祖祭祀」の方が、「祖先」というよりは「先祖」の方が日本の言葉でありますし、それから「崇拜」というより「祭祀」という方がよろしいかと思えますので、「先祖祭祀」という語をより多くこれから使うことになろうかと思えます。ただ、英語で表現する場合は分かりやすく ancestor worship と言うことは、そういう慣用語を使用することは別に拒むものではございません。

さて、この「先祖祭祀」と、こう申しますと、実はここに「先祖供養」というもう一つ概念をご紹介をしなければならないわけであります。と申しますのは、先ほどヘレン・ハデカーという方が Encyclopedia of Religion の中で ancestor worship の項目を担当して書いた。その中で次のような区別をしてい

るのです。一つは、死者の忌日に営まれる周期的な儀礼。死者っていうんですから、死者ご一同様でなくて特定の死者（個々）に対しましてその命日に営まれる周期的な儀礼。もう一つは先祖一同に対する年中行事的な儀礼。この二つを区別しているのがたいへん参考になると思うわけであります。先祖一同に対する年中行事的な儀礼というのは、これはまあ「先祖祭祀」と言っているわけですね。それから死者の忌みに営まれる周期的な儀礼というのは、これはまあ「先祖供養」というか、あるいは「死者供養」というのがいいのではないかなというふうに思っております。

そこでですね、一つの例をお話したいのでありますが、ちょっとこの例はたいへん古いのでありますが、明治の終わりから大正にかけて、細民調査というのが行われたのであります。第1回は明治44年で、第2回大正元年、第3回が大正10年というふうに明治から大正期にかけて内務省の**局で行っておりますが、東京都大阪で貧民窟を対象にして行ったわけです。そこで仏壇を持っている比率が出てくるんですが、第3回調査の深川で申しますと、73%持っているんですね。73%持っているっていうんですけど、この場合の仏壇の定義が我々が考える仏壇とは全然違っていて、何か位牌を置いておけば、これを仏壇ありと認めるというそういう調査のやり方なんですね。仏壇という以上は位牌があって、それを取り囲むオルターといいますか壇があるというんですが、位牌があればそれで仏壇ありと認めるということであつたと書いてございますので、73%というのは別に不思議ではございませんけど、この細民調査によりますと、1世帯平均4.5人で、平均の部屋の数が1.0室で、そして平均の広さが4.2畳、従いまして一人あたり0.9畳と、それでずっと生活をするわけですから、想像を絶するといってもいいですね。それで窓がない世帯が59%とか。だから6割が窓無しとか、そういう非常な想像を絶する…。それから、ふつう天井までは1丈なんですけど、ところが7尺なんです。貧民窟は。2メートル10センチですね。当時は180センチの大男はいなかったろうと思いますが、それにしてもすぐ天井がつかえるような低い天井で、そして狭いところで、それでいて73%も、位牌だけでしょうけど、がある。それも木の位牌でなくておそらく紙

に書いて貼った。そういう処では幼児死亡が非常に多いですから、それから若くて死ぬ率が非常に多いですからね、ですからどの夫婦にもですね、夫婦といっても離れたり付いたりいろいろ一定じゃないそういう世帯でございますけれど、たくさんの死を経験している。だいたいどの世帯も死を経験していると思うんですけどね、小さい子供達の。まあ、ともかく73%の位牌といいますか仏壇があるということを言っています。これは死者供養なんですね。そこではまず先祖祭祀というのはないと考えていいんじゃないかと思います。先祖祭祀があるということはですね、これはその背景に家があるんですね。で、細民の世帯は家を形成しない。形成しえないわけです。そういうことを見ましても先祖祭祀の背景には死者供養があるんですが、しかし死者供養があるからといって先祖祭祀があるわけでない、ということになるわけです。じゃ、死者と先祖はどう違うかと言いますと、先祖は死者であることは間違いありません。生きながらにしてご先祖になるということはないですね。先祖は死者でございます。しかし、死者のすべてが先祖になるわけではないですね。日本人の考え方によりますという。日本人はそう考えてきた。死者は子孫の供養に供養(?),という言葉があるんですね。仏教的な言葉でございますが。死者の供養によって先祖になるわけであります。従って供養する子孫がなければ死者も先祖になれない。で、先祖になれない死者、これは無縁仏であります。無縁仏は災いの元、災いをもたらすというふうに信じられたわけであります。ですから、家生活というものを背景として、畳の上で親族、縁者に看取られて息を引き取る場合には、供養は保証されましたけれど、かつての戦国の世、そういう時代には戦乱のちまたで非業の死を遂げる人が多かったわけでありますが、そういう場合には供養してくれる縁者もいないということも少なくない。従って戦乱が続きますと無数の無縁仏が出てくる。そしてその無数の無縁仏が天変地異のもとになる。そして災害とか伝染病をもたらすというふうに恐れられまして、これは平安時代以降のいわゆる御霊信仰というものが、そういう構造をもっていたわけであります。で、御霊信仰に基づくさまざまな供養が、無縁仏に対する供養が行われたわけであります。先ほど申しました死者に対する供養の儀礼、こ

れは死者が先祖になると、死者が子孫の供養によって先祖になるという民間信仰と、そして死者が成仏をするという民間仏教の観念が一つになっていると言っているかと思いますが。おそらく死者が先祖になるという民間信仰はですね、死者が成仏するんだという民間仏教の観念に規定されつつ形成されたんだろうと思います。そうしますと、死者供養ということを考える場合には仏教における死者供養ということについて、あらましかけでも心得ておかなければいけないんじゃないかと思うわけであります。

圭室諦成という方がおりまして、この方が葬式仏教という本を書いております。昭和38年の本でございます。これがたいへん参考になりますので、それによりながら申したいと思うんですが、仏教ではですね、人間を3種に分けるわけですね。一つは100%良い極善、もう一つはその反対の100%悪い極悪、その中間は中善中悪。極悪の者は亡くなりますとすぐさま極楽へ、100%悪いのはすぐさま地獄へというふうに行き先が決まるわけでございますが、これに該当する人は滅多にいない。極悪の者も極善の者も滅多にない。そういう範疇を作るだけのことで、ほとんどすべては中善中悪というものである。こういう人間観を持っているわけですね。これは亡くなりましても地獄、極楽という次の世を考えているわけですが、これは亡くなっても次に行くところが決まらない。そこで短くて7日、長い人は49日待ってはじめて次に極楽に行くか、地獄に行くかが決まる。このペンディングである機会を中陰で言うんですね。中有とも言います。その間、子孫あるいは縁者は亡くなった人がいいところに生まれるようにつまり極楽に行けるように7日毎に仏事を行いまして亡くなった人に回向をする。そして $7 \times 7 = 49$ 日、これは尽7日とも満中陰とも申しまして、この日盛大な仏事を行う。ですから中陰7日会の仏事と言うのは、またそれを支えた信念というのは仏教本来の物であったと言われます。

ところがこの信仰が中国に伝えられまして、中陰7日会の仏事に加えて、100か日、それから1周期、3回忌、3回忌は満2年なんですね、がつけ加えられまして、併せて10の仏事になりました。この10仏事が成立します過程で、これは釈迦が説法されたものであるということで、この10仏事を正当化するた

紀 要 1

めの十王経という偽のお経が作成されて流布されるわけです。十王経によりますと、亡くなった人は亡者というんですが、亡者は冥土で10の王が閻所の番人みたいなにいるわけです。兵卒を従えているその10人の王の閻所を順々に通過いたしまして、そして裁判を受けるわけです。どういうふうに裁判するかといいますと、10人の王というのはいちいち初7日は秦広王、ふた7日は初江王、み7日は宋帝王とか、よ7日は伍官王だとかずっと配属が決まっています10人の何とか王というのが、その中の一人が閻魔王なんですね。で、伝えられておりますのは道教の信仰と結びつき、これは中国に入ってきてからですから、閻魔大王が代表で日本では伝えられておりますが、10人いるわけです。閻魔大王についてですね、しばしば地獄・極楽税というのがございまして、それを見ますとありますように、ハリ鏡という鏡で亡者をその前に引き据えますと、亡者の生前の悪行の数々が写し出されるわけです。それから併せて亡者の子孫縁者が一生懸命供養しているその姿もです。そこを両両勘案しまして、「よろしい極楽へ」とか「まだダメだ」とか決めるということになっております。ですから追善供養というのは怠りなく営まなければならないとされたわけであります。

この十王経または10仏事が日本に中国から伝えられたわけですが、日本で更に分化いたしましてそれに追加されたんですね。今までは7仏事、中陰・7日会の仏事に加えまして100ケ日、1周忌、それから3回忌と。日本で更に7回忌と13回忌と33回忌、その他にも（その間も）やるところもありますが、基本的には最初は7回忌、13回忌、33回忌でおしまい。というこの3つが追加されました。12世紀から14世紀頃、大体そのぐらいの時代に13の仏事が完成をしました。のみならず、これを正当化するために偽経とまではいかないですが、13仏章というものが偽作されておるわけであります。

これは遺族の、故人を極楽往生させたいという願いに乘じまして追善供養の回数を増やすことによって寺の、僧侶の財源確保をはかる企てであったという面もあるわけであります。で、民俗調査によりますという、33回忌で、ないしは早くて17回忌、遅くても33回忌の後の50回忌を「弔い上げ」というふうにと呼びまして、他の呼び方もありますが、様々な切りをつける儀礼がございま

して、最終の年回として、それを境に仏が神になる、死者は仏、それが神になるというそういう民俗がある。ですから家の神に融合していくというそういうふうな民俗が各地にあります。この13仏に加えましてですね、毎年の祥月命日とか、毎年の命日とかそれから毎月の月忌といいますか、15世紀以後ですね、庶民の間に一般化いたしましてここに一連の死者供養を担当する僧侶と、そして僧侶の追善サービスに対しましてお布施を捧げる信者といいますか、江戸期になりますと檀家ということになりますが、その関係が定型化いたしまして江戸時代の寺檀関係というものが作られていったわけでありまして。

こうして死者供養が発達いたしまして、寺院経済を安定させるわけですが、寺院の財源確保のために僧侶が死者供養を発達させたと先ほど言いましたけれども、そればかりではない側面、つまり死者供養を求める遺族の側の要請に応じた側面もあるわけでありまして。いくら僧侶がもっともっとたくさん供養せよと言いましても遺族の側でそれを求めるニーズがございませんでしたら、その企ては空しいものであります。ちゃんと成功したという事は遺族の側でそうして欲しいというそういう念慮が働いたからであると、ですから遺族の側の要請に応じた側面もあると考えなければならぬわけでありまして。こういうふうな一連の死者供養の形式が完成いたしましたのは、だいたい500年位前、15世紀でございまして、15世紀というのは応仁の乱に代表されますように戦乱が続いた、かつまた生産力水準の低い時代でございました。にもかかわらず、財を投じてなぜ人は僧侶に供養を依頼せざるを得なかったか、という事につきましては、その当時の人々の生き死にのパターンを知らなければならぬわけでありまして。

そこで資料の表1をご覧ください。いま15世紀云々して、にわか近代に飛びまして大正9年からの数字でなんだかおかしいじゃないかという事になると思いますが、これでもいいんじゃないですかということ、後で説明をさせていただきたいと思っております。大正9年から20年おきに、死者の年齢層分布を見ておりますが、大正9年段階で見ますと、それぞれの歳に亡くなった人を全員集合をかけているわけです。そして年齢別に並んでくださいと。0歳

紀 要 1

から5歳未満ですね、5歳から15歳未満、15歳からは15歳で刻んでおりますが、こういうことなんです。これで見ますと、大正9年段階では亡くなる人の4割り近くが5歳未満なんです。それに15歳未満を加えますと、4割強ですね、4割強がそうなんです。それに30歳未満を加えますと半分を上回ってしまうんです。つまり死ぬのは老人じゃないんです。もちろん老身も死ぬんですよ。ですけど、むしろ数から言えば若い人が死ぬ。そういう時代なんですね。死者にはむしろ若い人が多い。この時代の主な死因は何かと言いますと、赤痢とか疫痢とか腸チフスとかパラチフスとかコレラ、ペストとかいうような急性の感染症なんです。伝染性の病気なんです。

ですから、伝染病がひとたびその地区を冒しますというと、体力の弱った人とか抵抗力の弱い人は老いも若きもバタバタ倒れるわけでありまして。そして短い思いではかなくなったわけですね。私の少年時代などは、田舎ですから、田舎にはしばしば避病院というのがあるんですね。それは部落と部落の間の人のいないところに。腸チフスとかパラチフスとかはやって、かかりますと、石炭酸などで消毒しまして病人をそこに集めて、そして後かからないように隔離するわけです。隔離してあとを安全にするわけですね。で、隔離された人はどうなりますかと言いますと、非常に死亡率が高いんですね。しかし2週間かそのくらい経って生き延びる人は帰ってくるし、はかなくなる人はそこではかなくなる。で、永いこと1年も赤痢があったというのは無いんですよ。そんなことは無いんです。ほんとに10日か20日かそのくらいでケリがついちゃうんです。その当時の状態で。そういうことでございました。

生産力の低いために栄養状態も悪いし、環境衛生も発達しておりませんし、医療水準も低いという状況の中でこういう事態が出現したわけです。で、これを15世紀に延長すればいいんでありまして、15世紀頃は今申しましたような栄養状態とか環境衛生とか医療水準というのはもっともっと悪かったはずでありましょうし、伝染病に加えて飢饉とか兵乱などが加わりまして、人々の生死はもっともっと惨澹たる状態であったと考えていいのではないかと思います。そうしますと、大正9年の統計が示唆するところを誇張して捉えますと、何世紀

も以前の人々の生き死にの形を知ることができるのではないかというふうに思うわけであります。その下に本願寺蓮如の、ちょうど15世紀でございますが、今日の本願寺の基礎を築きました15世紀日本宗教界の覇者ともいえるべき、おそらくそしてわが国の文書伝道の草分けというべき蓮如という、この人の、この人は文書とも御文書とも御文とも呼ばれる書簡を各地の門徒に出して、激励したり指導しているわけでありますが、そこに「白骨の文」という名前で有名な書簡があるんです。これは本願寺教団の葬式には必ず読まれまして、会葬者の涙を誘った朗朗賞すべき名文なのですが、ちょっとそれを読んでみますと、私の読み方は朗朗じゃないんですけど、「朝には紅顔ありて夕べには白骨となれる身なり。既に無常の風来たりぬればすなわち二つの眼たちまちに閉じ一つの息永く絶えぬれば紅顔空しく変じて……」こういう文章なんですね。これを見てわかりますように、「朝には紅顔夕べには白骨」これは対になってるんですね。それから「二つの眼一つの息」というように対になっているわけなんですけども、ですから文学的な技巧というのがここにあるんですが、しかし「朝紅の顔で元気であった人が、夕べに亡くなって白骨になる」というのが、単なる文学的誇張であるならば、聞く人々に袖を絞らせるというふうなことはなかったはずであります。この時代の人々の生き死にの在り方はこの文章に反映していると考えていいのではないかと思うんです。先ほど言いましたように、朝元気でいた者が夕べにはもはやこの世にいないということは、当時とて稀だったかも知れませんが、先ほど言いました急性感染症で2～3日ではなくなるということならいくらかもあったんじゃないでしょうか。これは誇張ですけどね、そのくらい、その当事者にとってみれば、後から考えればまさに「朝に紅顔夕べに白骨」の思い切実であったろうと思うんですね。そういう生き死にの死に方であったわけであります。ですから「老少不定の境」と言っているわけです。しかし、今日、これを慣習的に耳にしておりますのであまり考えませんが、シリアスにこれを見ますと、なんだこれ交通事故にあったのかというふうに思うんじゃないでしょうか。今日こういう死に方はしないわけです。こんなはかない死に方はしない。するのは事故か自殺ですよ。そうでなきゃこ

んな死に方はしません。

この時代は、死というのは非常に身近な出来事でありました。身近であるというのは、一つには今日のように病院や施設で死亡するのではなくて、自宅で在宅死であると、それからまた3世代家族の形を取れば取ったはずでありますからして、従って多くの人が、その死を経験するということになった、ということもありますが、そのこと以上に死は、幼・少・壮・老を選ばなかった。老人を狙い撃ちするんじゃなくて、若い者も、壮年の者も、ともかくこいつはと思ったらそれに飛びかかるというそういう死の在り方であった。伝染病がまわりますという、どの人の背後にも死の影がちらついていたというそういう時代であります。ですから、幼くして親を失った子とか、いとけない少女をなくした母親とか、あるいは杖とも柱とも頼む青壮年の子を失った老いた親というのが、至る所にあった時代であったはずであります。

そうしますと、そういう人々にとりましては、来世というものは現世と隣り合っている、現世の次が来世であるというだけじゃなくて、いわば現世と交錯しているという、そういうことではなかったかと思うわけであります。そういう人々は、亡くなった人と共に歩むという、来世にある人と共に歩むという、亡くなった人は死んだんじゃないで、来世で生きていなければいけない、来世に生きている人を背負いながらこの世であるという、そういう形で死は身近であったはずですよ。

そういう時代ですから、死の悲しみもまた格別でありまして、そこに死の悲しみの慰めとしての儀礼が発達したわけであります。先ほど僧侶が寺院経済を安定させるために中国から十仏事が来て、それを十三にして、さらに祥月命日を入れたり月忌を入れたり、ほんとにしょうがないと、葬式仏教は困るというふうな感じを与えないことはないんですが、しかしその当時の人々からして見ますと、それはそういう機会に故人を思いだす、そして故人と共に歩む自分を考えるという、そういう必要があった。その必要に応じた面があるということを考えざるを得ないのでございます。そこで葬式仏教の機能として、死者供養の機能としてちょっと言っておきましたんですが、一つは儀礼によって悲しみ

の感情表現を助ける。さきに紹介いたしました白骨の文ですね、あるいはそのほかの宗派におきましてはご詠歌というのがありますね。これは僧侶といえますか、聖職者がするのではなくて、地域のご婦人が集まって死者を送るためのご詠歌を歌う、等々ございますけど、悲しみの感情表現の機会を与えるわけですね。ということで、儀礼がそういう意味を持っております。

それからもう一つは教えによりまして死の不条理を受け入れるのを助けるわけであります。どのように死んだか、いかに死んだかということはいくら説明してもらっても納得できない。なぜその子が死ななければいけなかったか、「なぜ」に答えるというのが宗教の役割ですが、教えによって死の不条理さを受け入れるのを助ける。仏教では無常とか因縁とかいろいろな用語を用意しておりますけれど、教えによって死の不条理さを受け入れるのを助ける。

第三は、全体として死者との交わりを助ける。先ほど言いましたように、遺族にとりましては、その遺族の生きている限り、先に亡くなった人とともに歩んでいるわけですから、従って交わりを求めているわけです。その交わりを助ける。死者と交わる公式の機会を、天下晴れて堂々と死者と交わる機会を与えるということになろうかと思えます。その下にジェフリー・ゴラーという人の〈テープ反転〉に遺族が近親を失った悲しみを克服するために、今6週間から3月ぐらい社会的な支持と援助が必要だと書いていますね。最低限6週間、多くても3月かも知れませんが、社会的支持と援助が必要だと書いています。ところがイギリスでは哀悼の儀礼がすっかりなくなってしまって、火葬場から帰ってきました、そして親族が相まみえる。そして死んだ人のことをいつまでも思っていて悲しみの表情を出すようでは、十分マチュアな人間ではないというふうに、冷たく人々は見ると。そこで、感情表現ができない→内向する。そうしますといつまでも悲しみが克服できない。ですから6週間から3月ぐらいの間は人目をはばからず悲しみを表現できるような、それを周囲が受け入れるような、そういうことがなければいけない。イギリスではそれがなくなって久しいということをこの書物の中で言っているわけですが、たまたま日本では6週間と言うのは $6 \times 7 = 42$ で、中陰の期間、中陰は $7 \times 7 = 49$ 、ま、

紀 要 1

だいたい中陰ですね。3カ月と言うのは90日、100カ日にほぼ相当する。だから日本の中陰とか100カ日はまるで「悲しみの社会学」で言われている儀礼にちょうど対応することだなという感じが致すわけであります。

さて、もう一度表の1に帰りたいと思うわけではありますが、そうしますと、話は4番目の大衆長寿(?)の時代の先祖供養と先祖祭祀ということになるんですけど、昭和55年の一番新しいところを見ていただきたいんですが、そうしますと、乳幼児死亡率の顕著な低下を反映いたしまして、5歳未満というのはわずかに2%、15歳未満を合算しても3%にすぎないんです。かつては両方で42%あったんですね。それで30歳をすぎますと、この比率がやはり上昇してくるわけですが、そして75歳以上になりますと46%に達する。60年前の大正9年には8%でしかなかったのに対しまして、今日では46%。これを見ますと、今は老人が死ぬという時代なんですね。老人が死ぬのは当たり前じゃないかと感じますが、昔は当たり前じゃなかった。当たり前になったのは戦後のことなんですね。若い人は死なない。若い人は乳幼児期に一つのピークがございますけど、それを過ぎてしまいますと事故とか自殺とかがなければ、あまり死なないわけです。亡くなるのはよほど不幸だということになりますね。だいたいもう70歳以上生きられる、そういう時代でございまして、この60年間に日本人の生死パターンに革命的な変化が起こっていることがわかります。これは葬祭の儀礼というのはこういうことを意識しておりませんが、こういうことに規定されているんですね。

こういう事実をちゃんと把握しておく必要があろうかと思って出しておいたのですが、念のために中間をご覧くださいませうか。そうしますと昭和15年と35年ということになりますが、大正9年のパターンから昭和55年のパターンへと次第に変わってますね。ちょうど私の説明に無理がないように変わっておりまして、それでも昭和15年の方はどちらかというと大正パターンをまだ色濃くとどめておる。それに対しまして昭和35年の戦後の方は現代のパターンに近い。ですから、大正9年のこのパターンからだんだんと昭和55年のパターンへとこう動いて行った。ここに一大革命がこの60年間に生じておるということが

わかるわけであります。

大正パターンではですね、これは単に大正だけでなく、前近代的なパターンでもあるわけですが、死者4人のうち60歳以上がかりうじて1人あったにすぎないわけです。ところが今日では60歳が3人強になるということですね。こういうことが大衆長寿といわれております今日の人間生死の姿であります。

このように変化しましたのは、栄養の改善とか保健行政、環境衛生の進歩とか医療サービスの改善ということによるわけであります。この大衆長寿の時代の特徴的な死因は、これはご承知と思いますけど、脳血管疾患とか脳卒中とか脳出血とか、それから悪性新生物、これは癌であります、それから心臓疾患、それから高血圧性の疾患など、成人病というふうに総称される病気であります。成人病ではですね、短期間の患いではかなくなるというよりは、長患いの後に他界するということになります。簡単に勝負がつかないわけです。長い患いの後にしか死は訪れてこないということになります。しかも、場合によりましては寝たきり老人とかですね、あるいはアルツハイマー型のボケ老人、老人性痴呆にかかりまして、そして配偶者や子供に多大の負担をかけた後にしか静かな死がやってこないという、そういう者が少なくない時代となったわけであります。長生きに長患いが伴いがちな現代、先祖供養も変化の兆しが見えるのも当然といえましょう。

そこでいくつか書いておきましたんですけれども、人生儀礼に変化が生じた。厄年というのが意味がなくなったとか、そういうことでございますが、それから、仮親慣習というのは、かつていつ死ぬかわからない、親にとっても命がいつ終わるかわからないという時代には、特に子供を持つ親にとりましては、子供の将来の確保のために仮親といいまして名付け親を頼んで、あるいは拾い親を頼んで、あるいは元服親を頼んでいざという場合に後ろだてになってもらうようにしたわけですね。もう今日では、親は子供を全部育て上げて、そしてなおかつですね、いわゆる empty nest（空になった巣）と呼ばれるそういう時期を20年ぐらい持つ現代になっておるわけですから、もう仮親なんて必要がない。せいぜいありますのは、婚礼の際の仲人親にその落ちぶれた姿をとどめて

いるわけであります。

しかも、今日の葬式などを見てもみますという、従来は満中陰の仏事には斎（トキ）がつきものでありますが、従来は精進料理であるはずでございしますが、今日ではお通夜の席から生の魚とか肉が食前に並ぶことも少なくないようであります。そのことは近所づきあいという意味もあるんですけど、老いた親をとにかくよく看護をして、看取って、往生してもらった。大事業の完成の席のような、そういうところもなくはない。当事者は悲しみに打ちひしがれておりましても、若い人が亡くなったときとはまったく違った様相を呈するんです。だからそういうところでは魚がでてもおかしくはない。それから、お酒を少したくさん飲んでもおかしくない、というふうに考えてふるまっておる。そういうのが現代の争議の後の斎の姿ではないでしょうか。

現代の仏事執行の実態を知るための資料を曹洞宗の宗勢総合調査というのがございますので、それを見ますと、時間がありませんので簡単に申しますとですね、この調査が示す昭和40年から昭和60年までですね、3回の調査20年間ほとんど変化がなかったと言っていいのではないかと。おそらく親族縁者を招いての供養というのは簡略化されたかも知れませんが、死亡があった家自体で勤める内輪の仏事の励行度はほとんど変化がないと言っていいのではないかと。という感じが致します。それから表のBは、月忌というのはこれは曹洞宗で月行というものでございしますが、これは全体として変化なしという、そういう感じが致します。20年間とくに変化はない。世俗化がいわれていますけれど、昭和48年の後、オイルショックの後、低成長期に入りまして宗教回帰ということが言われておりますが、それを受けているとも言えなくはありませんが、とにかく変化はない。

それから、この表には出しておきませんでしたけれど、年忌の励行の回数、これは昭和40年と50年の調査だけしかございせんので、出しておきませんでしたけれど、これは40年から50年までの間をみますという、むしろ励行度が高まっているのではないかと。というふうな印象の方が強いわけであります。ということは、どうも追善供養という意味合いが薄れて、もっと別のところに死者供

養といいですか、その意味が移っているのではないかという印象があるわけであります。

今日、80歳まで生きて、そして亡くなるといたしますと、以前の方は50ぐらいで死んだ、で、33回忌の弔いあげまで今日の方は生きてしまうわけです。かつての方は弔いあげまで供養してもらって先祖様ご一同の中に円融する、しかし今はその時期まで生きてしまうわけでありますから供養ということがあまり切実でない。逆に言いますと、早く仏になってしまう、早く供養を必要としない霊になってしまうということでしょうか。

それからもう一つですね、年忌などが依然として励行されている、いっそう励行されていると言えるかも知れないという動向は、私は死者供養、先祖供養に新しい意味合いが加わってきたからじゃないか、それは何かと言いますと、自己確認の機会じゃないかと思うんですね。self identity といいますか。自己確認の機会ではないか。親が死んで、そうしますと50前後から60になっているわけです。そうしますと、もう先が見えておりますし、年忌が勤められていくうちに、勤めを持っている人も退職していく。どこか勤めているうちは、例えば「成城大学の森岡でございます」などと言っておりましたが、それがなくなりますと、まったくどこを拠り所にして自分自身を位置づけるかさっぱり……、漂う存在になってしまうんじゃないでしょうかね。主婦は始めからそうですし、自営業者の場合もそれに近いと言えますし、老人は先ほど言ったようにそれに加わって参ります。ですから、いよいよ自己確認のよすがを得る必要が生じている年輩だと思えますけれど、その場合に自分を生んだ親というのは最も自己確認の確実な手がかりじゃないでしょうか。そこに親族一同がくるわけです。こういう兄弟と親戚の人々の中であって、自分は社会的な存在であるんだということは、理屈なしに迫ってくる思いじゃないかと思うんですね。

ですから、私は励行されておるというのは現代の人々が自己確認の機会から疎外された場合に、一番それを得易いのは、親とか先祖との関わりにおいてであるということからではないかというふうに思っておるわけであります。

これで終わりたいと思いますが、本日説き落としたことが幾つもあるんです

紀 要 1

ね。それは先祖祭祀というのは先ほども申しましたように家というのが背景にあるわけなんです。家の相続人が祭祀担当者なんです。それから、家の初代から代々が先祖なんです。で、プラス・アルファでそれにくっつくのがあるんですね。よそへ縁付いて帰ってきた兄弟とかいうのも亡くなりますと、そこへくっつく格好になりますけども、基本的にはそういうものなんです。ところがそういう家に変化した、変貌してきた、解体してきた。そうすると先祖祭祀はどうなるか。先祖祭祀は全体として家を忘れるんですね。

私の考えでは、直系的な、ずっと初代からわかる家はそうないと思いますが、遡った形の先祖祭祀ではなくて、自分の身近な人の追憶、先祖祭祀というよりは物故近親の供養といいますか、亡くなった近親なんです。せいぜい自分がかわいがってもらった祖父母ぐらいですね。しかも日本の伝統的な先祖祭祀では、家の直系の下で妻方は排除されるわけですが、現在はむしろ夫方ほどではないかも知れませんが、夫側もまつり妻側もまつる。ですから双系、男の系統単系の先祖祭祀の陰が薄れ、夫・妻ともに双系の、しかしそんなに遠くへ行かない。いわば世代深度が浅い、そういう物故近親の供養。ですから死者供養になっているんじゃないか。先祖祭祀は廃れたけれど、死者供養になっている。先祖祭祀は廃れたというけれど、先祖祭祀の基本には死者供養があったわけですね。

死者供養が家という制度を土台にして先祖祭祀というものを作り上げてきた。その家に変貌したり解体すれば、先祖祭祀自身は揺らいで参りますけれど、それは文化的伝統として残りましょうけれど、切実な思いで再生産されるようなものでなくなってきた。切実な思いをもって繰り返されるのは死者供養じゃないか。双系的な物故近親の供養ではないかというふうに思っているわけですが、あまり詳しいことを申し上げる時間ありませんので、一応これで本日の私の責任は不十分ながら果たしたということにさせていただければありがたいと思います。

(本講義は平成元年5月24日、日本伝道研究所の企画して行われたものです。文責在記者であり、図表は省略しました。)